

江戸時代初期の桑名宿

郷土史家 西 羽 晃

すでに書きましたように、慶長6年正月に東海道の各地に宿駅が設けられました。桑名宿では無償で36匹の馬を提供する義務を負い、その代償として馬1匹につき50坪の計算で屋敷地1800坪の税金が免除されました。伝馬役を務めた人たちが住んだ所を伝馬町と呼びました。計算の基礎は次の宿までの距離の長さによります。四日市宿では1匹につき80坪の計算で2880坪の免除です。桑名から四日市までは3里8町、その当時は四日市の次の宿は亀山であり、5里16町もあったのです。少し長すぎるので、のちに石薬師と庄野宿が設けられました。



江戸時代の伝馬町は東海道を往来する旅人で賑わったが、
現在では人影もまばらだ。

徳川家康は慶長10(1605)年2月14日から16日まで桑名に滞在し、その後に上洛しています。2代将軍となった徳川秀忠は同年5月18日から20日まで桑名に滞在し、その後は清州(清須)に行っています。同20年1月6日に家康は桑名で泊まり、翌日に熱田へ渡っています。同年2月1日に秀忠も桑名で泊まり、翌日に熱田へ渡っています。その後も家康が1度、秀忠が3度、3代将軍の家光が3度桑名で泊まっています。将軍が桑名で泊まるために、桑名城の本丸に屋形が建てられました。その後も本丸は将軍のために明

けられていました。しかし家光の後は将軍が上洛するのは、幕末の文久3（1863）年、14代将軍の家茂までありませんでした。家茂は桑名では本統寺に泊まっています。

大名など身分の高い人が泊まる宿は、最初のころは特定の本陣でなく、富裕な町人の家に泊まっているようです。桑名船馬町の太田家に泊まった記録では、慶長12（1607）年10月15日、天皇の勅使・広幡大納言が江戸へ下る時に、同13年10月には浅野弾正夫妻が江戸下りの時に、島津の殿様は同15年7月27日に江戸下りの時と同10月1日に上洛の時に、同19年2月15日に織田有楽斎が上洛の時です。

江戸幕府の制度も次第に整えられるとともに通行量も次第に増加しました。増加に対応するため、寛永7（1630）年には新しく船馬町も開発されました。同10年には御継飛脚代として毎年米41石7斗2升8合が幕府から桑名宿に支給されました。

七里の渡しの渡船の組織、担い手、状況などは明確な資料が残ってなくて、詳しいことが判りません。